

## ヤスパースから見たキェルケゴール —自己固有の真理を探究する誠実な人物として—\*1

中村 元紀

### はじめに

哲学史上において、キェルケゴール\*2は、一般に実存概念の祖として知られており、多くの哲学者がその実存思想の影響を受けている。ヤスパース\*3もそ

\*1 本論文は、2018年度に開催されたキェルケゴール協会第19回学術大会における研究発表「現代哲学における実存概念—キェルケゴールとヤスパースの場合—」に修正・加筆を行ったものである。ちなみに、本論文中の傍点は、本論文執筆者の強調、□は、本論文執筆者の補足、<>は、本論文執筆者の強調する重要語句をそれぞれ意味する。

\*2 本論文で用いるキェルケゴールの著作集は、ドイツ語版ヒルシュ訳 (*Gesammelte Werke*, übersetzt und hg. von E. Hirsch u.a., Düsseldorf, Köln 1950-1969. 以下、GWと略記)である。その引用箇所を示す際は、GW、巻数、著作名、頁数の順に記す。翻訳に際しては、邦訳『キェルケゴール著作集』白水社を参照した。また、キェルケゴールの日記に関しては、ドイツ語版ゲルデス訳 (*Die Tagebücher*, ausgewählt, neugeordnet und übersetzt von H. Gerdes, Bd. I-V, Düsseldorf, Köln 1962-1974. 以下、Tagと略記)を用いた。その引用箇所を示す際は、Tag、巻数、頁数の順に記す。

\*3 ヤスパースの著作とその略記は、以下の通りである。

Ph.I : *Philosophie I. Philosophische Weltorientierung*, 4Aufl, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1973.

Ph.II : *Philosophie II. Existenzerhellung*, 4Aufl, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1973.

Ph.III : *Philosophie III. Metaphysik*, 4Aufl, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1973.

VE : *Vernunft und Existenz. Fünf Vorlesungen*, München, 1960 :in Karl Jaspers Gesamtausgabe, Band I/8, *Schriften zur Existenzphilosophie*, hg. von Dominic Kaegi, Schwabe Verlag, Basel, 2018.

W : *Von der Wahrheit. Philosophische Logik*, Erster Band, München, 1947.

AP : *Aneignung und Polemik. Gesammelte Reden und Aufsätze zur Geschichte der Philosophie*, hg. von H.Saner, R. Piper & Co. Verlag, München, 1968.

Kier : *Kierkegaard* (1951) :in AP

KierT : *Kierkegaard. Zu seinem 100.Todestag* (1955) :in AP

KierH : *Kierkegaard heute* (1964) :in AP

の実存思想に影響を受けた人物の一人である。なぜなら、その理由として、『哲学』第3版以降に収録されている、ヤスパースが自著『哲学』を執筆していた当時のことを振り返る仕方であられた「私の『哲学』へのあとがき」(1955年)の中で、「私は、キェルケゴールの実存という『概念』を自分のものにした」(Ph.I.S.XX) \*4、というヤスパースの叙述を挙げるができるからだ。

しかし、ヤスパース研究者林田新二の理解によれば、ヤスパースが、キェルケゴール思想を高く評価し、受容したとしても、それは、自己固有の真理に対する誠実さのみであって、キェルケゴール思想の内容そのものを受容したわけではない\*5、としている。しかし、私は、この林田の理解に対して、異議を唱える。なぜなら、ヤスパース哲学を読み解いていくと、キェルケゴール思想との相違性が見受けられる一方で、それ以上にキェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性を多く見出すことができるのであり、それは、ヤスパースがキェルケゴール思想そのものを高く評価し、それを受容したことに他ならない、と私は考えるからだ。

では、そのキェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性・相違性とは何か。また、そもそもヤスパースは、キェルケゴールをどのような人物としてとらえていたのか。本論文の目的は、こうした問いに対して、次の考察の手順のもとに、その答えを見出そうと試みるものである。

その手順とは、まず、ヤスパース哲学を読み解く中で見えてくるヤスパースのキェルケゴール受容と、それに伴う両者の類似性についての考察(第1章)を行った後で、次に、ヤスパースの著作の中で、キェルケゴールについて論じている箇所を読み解き、その中で見出すことのできるヤスパースから見たキェルケゴール像についての考察を行い、そのうえでキェルケゴール思想とヤスパース哲学との相違性についての考察を行うこと(第2章)である。

---

\*4 原典であるドイツ語版では、*Philosophie I. Philosophische Weltorientierung* の序文 Vorwort の後 (Ph.I.S.XV) に収録されているが、その邦訳が載っている箇所は、『哲学』第3巻(形而上学)の末尾(275頁)に記されている。

\*5 林田新二、『ヤスパースの実存哲学』、弘文堂、1971年、92頁。

## 1. ヤスパース哲学におけるケルケゴール思想との類似性

ヤスパースは、『哲学』の中で、「実存とは、決して客観にはならないもの、すなわち、根源であり、その根源に基づいて、私が思索し、行為する」(Ph.I S.15) \*<sup>6</sup>ものだ、と叙述する。この文は、実存とは、それを対象物として客観化する仕方では理解しえない存在であるが、一方で私が思索し、行為する根源であるがゆえに、そこからあるべき<この私>の姿があらわれてくるような本来的自己存在である、ということの意味する。また、ヤスパースは、続けて実存を次のように定義する。

実存とは、実存自身に関わり、かつ、その実存自身に関わることの中で、実存自らの超越者に関わるものである。

(Ph.I S.15) \*<sup>7</sup>

すなわち、実存とは、自らの内面性に関わるような仕方で、自分自身の内で思索を行い、そうした思索の中で、自らの超越者 *Transzendenz* という悟性 *Verstand* (分別知もしくは合理的・論理的知性のこと) では理解不可能な不知 *Nichtwissen* なる存在である自己固有の真理に関わろうとするものだ、とヤスパースは定義する。

この定義が、ケルケゴールの著作『死に至る病』の冒頭で表現されている、いわゆる<関係としての自己>の定義\*<sup>8</sup>を用いたものであるということは、間違いなく明らかである。

また、こうした自らの内面性に関わろうとする行い、ケルケゴール思想の言葉で言い換えれば、関係としての自己の行いを、ヤスパースは、<内的行為 *innere Handlung*>と名付ける。その内的行為とは、人間が自己固有の真理を

\*<sup>6</sup> 引用文中の傍点は原文のまま表記した。

\*<sup>7</sup> 引用文中の傍点は原文のまま表記した。

\*<sup>8</sup> その該当箇所は次の通りである。「人間とは精神である。しかし、精神とは何か。精神とは自己である。しかし、自己とは何か。自己とは、関係であるが、その関係は、関係自身に関わるのであり、言い換えれば、関係が関係自身に関わる関係という点で、関係である。その自己は関係ではなく、むしろ関係が関係自身に関わることである」(GW17, *Die Krankheit zum Tode*, S.8)。

求める際、自分自身を客観的に観察することではなく、むしろ「私は本来何者であり、何をすべきか」を孤独の中で自らの内に問い直し、自分自身に積極的に働きかけ、訴えかけることで、自らの自己固有の真理を探ろうとする内省、いわば哲学することである (Ph.II S.35)。ヤスパースは、論集『わがもの化と論争』の中に収録されている小論「キェルケゴール」(1951年)の中で、「今こそ、私は内的に行為することを始めよう」\*<sup>9</sup>、とキェルケゴールのギーレイエ日記の言葉 (Kier :in AP S.301) を引用しているが、この箇所から文字通り、ヤスパースが内的行為という言葉に定義づけているのではないかと考えられる\*<sup>10</sup>。

そして、この内的行為こそ、キェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性であると言えるのではないかと私は考える。この考えを論証するために、以下においては、内的行為についての内容を、深く掘り下げ考えたうえで、キェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性について考察する。

まず、内的行為に値しない行いとは何か。その行いとは、ヤスパース哲学の言葉で言えば、条件拘束的行為 *bedingte Handlung* (Ph.II S.292) のことである。それは、ただ自らの欲望や衝動におもむくまま行動したり、自らの富や名声や権力等を維持したり、それらを拡大したりする生き方こそ、最高善であると思込んでいるがゆえに、そうした生き方に条件づけられる *bedingt* がままの行いをする事 (Ph.II S.292f.) である。そして、そうした条件拘束的行為を行う人間とは、現存在 *Dasein* のことを指す。その現存在とは、「私は、人生が持続する限り、良心の呵責もなく、享樂しようと欲する」(Ph.III S.80) がゆえに、自分自身を問い直すこともないまま、現に今存在しているにすぎないと

\*<sup>9</sup> ヤスパースが引用したキェルケゴールのギーレイエ日記の言葉は、以下のものが該当するであろう。「私は、今や、安らいだ仕方で、私自身に眼差しを据えようとする試みを欲し、内的に行為し始めることを欲する。というのも、そうしたことを通してのみ、私は、子供が意識でもって取り掛かった彼の最初の行為を行いながら、彼自らを『私』と呼ぶことができるのと同様に、より深い意味で、私を『私』と呼ぶことができようであろうからだ」(TagI S.22)。

\*<sup>10</sup> ヤスパース研究者中山剛史も、ヤスパースの述べる内的行為の由来は、このギーレイエ日記の言葉から来ているのではないかと考えている (中山剛史、「ヤスパースにおける『唯一無比の実践』としての哲学的思索―『内的行為』と『生の実践』―」、『論叢』、玉川大学文学部紀要、第 56 号、2016、42 頁)。

いう意味で、そのように呼ばれる。そのため、現存在にとっての自由とは、形式的自由 *formale Freiheit* (Ph.II S.185) という数多くの余地が残されている選択可能性の中で、ただ単に何かを恣意的に選ぶことを意味する。

こうした現存在のあり方を、キェルケゴール思想の言葉で定義するとすれば、どのようなものになるのか。それは、小川圭治が述べるような、「人生の目的は健康、美しさ、富、名声、地位、才能、美的感覚の満足など、自己の人格の外にある」\*<sup>11</sup>がゆえに「『日々を楽しめ』 *Carpe diem* をモットーとする利他的、享樂的な生き方」\*<sup>12</sup>を行う人間の存在様態、いわゆる、実存三段階で言うところの美的実存の段階であるということになるろう。

では一方で、実際に内的行為を行うとは、どのようなことか。それは、ヤスパース哲学の言葉で言えば、<無制約的行為 *unbedingte Handlung*> (Ph.II S.293f.) のことである。その行いは、条件拘束的行為によって得られる富や名声や権力等に不満を持ち、それらを捨て去って、あえて自分の身を賭すほどの覚悟でもって、自己固有の真理である超越者へと敢行する *wagen* ことを指す。そして、その無制約的行為を行う人間こそ、<可能的実存 *mögliche Existenz*> である。その可能的実存とは、上記で挙げた現存在という人間の存在様態の内にありながらも、超越者という自己固有の真理を求め、それに関わろうとすることで、実存という現実態 *Wirklichkeit* になる可能性を秘めているという意味で、そのように呼ばれる。そして、その可能的実存にとっての自由とは、自らの超越者に呼応するような仕方、自らの内なる「かくなさざるを得ない *müssen*」という内的必然でもって決意し、歴史的に一回限りの仕方、決断を下すことで成就される<実存的自由 *existentielle Freiheit*> である。

こうした可能的実存のあり方に相当するものを、キェルケゴール思想の言葉で定義するとすれば、何になるか。それは、榎田達美の述べるような、世俗に埋没し、墮落する「『大衆』や『公衆』への臆病な遁走の退路を断って」\*<sup>13</sup>、真のキリスト者であろうとして、一人神の前に立とうとする<単独者 *der*

\*<sup>11</sup> 小川圭治、「実存三段階と倫理の問題」、『理想』、第 269 号、理想社、1955 年、54 頁。

\*<sup>12</sup> 同上。

\*<sup>13</sup> 榎田達美、「思想編一 [I] 人間存在論 第 2 章 単独者」、大屋憲一、細谷昌志編、『キェルケゴールを学ぶ人のために』、世界思想社、1996 年、121 頁。

Einzelne >であると考えることができよう。

しかし、この考えが的を射ているとは必ずしも言えないかもしれない。なぜなら、その理由の一つとして、中里巧が、「キェルケゴールテキスト群から抽出される単独者の特徴としては、1. 神の面前foran Gud at være、2. 逆説性、3. 挫折（同時代の評価に逆行）、4. 深い情緒性（不安・絶望・静謐など）、5. 実存性、6. 孤立・例外者、7. 対話性、8. 反感的共感、9. 神との関わりでの罪性など」\*14が考えられる、と述べるように、キェルケゴール思想における単独者概念自体、多義的であるということが挙げられるからだ。また、もう一つの理由として、谷塚巖が、単独者とは「失われつつある人間の神に対する関係を、『ただ一人である』ことによってもう一度回復する」\*15ということの意味する言葉であり、それゆえ、『『単独者』は、あくまでも宗教という領域に限定されたあり方」\*16である、と述べるように、宗教的真理を探究するキェルケゴールの単独者は、哲学的真理を探究するヤスパースの可能的実存とは異なるものであるということが挙げられるからだ。

しかし、キェルケゴール思想の言葉で言えば、関係としての自己である単独者の信仰、および、ヤスパース哲学の言葉で言えば、可能的実存の行う内的行為は、それぞれ自己固有の真理を求めんとして、孤独のうちで自らの内面性に関わろうとする行いである、と少なくとも言うことができよう。また、そのうえで、その行いが、キェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性を示すものだと考えることもできよう。

以上が、ヤスパース哲学を読み解く中で見えてくるヤスパースのキェルケゴール受容と、それに伴うキェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性である。

\* 14 中里巧、「単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義」、『新キェルケゴール研究』、第 16 号、キェルケゴール協会、2018 年、87 頁～88 頁。

\* 15 谷塚巖、『『単独者』の基本理解』、『新キェルケゴール研究』、第 16 号、キェルケゴール協会、2018 年、74 頁。

\* 16 谷塚巖、『『単独者』の基本理解』、76 頁。

## 2. ヤスパースから見たキェルケゴール

本章では、ヤスパースの著書『理性と実存』（1935年）や、ヤスパースの死後、ヤスパース研究者ハンス・ザーナーが編集した、ヤスパースの講演や小論が収められている論集『わがもの化と論争』の中に収録されているキェルケゴールについての三つの小論（「キェルケゴール」（1951年）、「キェルケゴール—没後100年に際して—」（1955年）、「今日のキェルケゴール」（1964年））の中で記されているキェルケゴールについての記述を取り上げることを通して、ヤスパースから見たキェルケゴール像について考察する。

私には、ヤスパースが、自己固有の真理に忠実に生きんとするキェルケゴールの実存的な生き方に共感しつつも、その一方で、その生き方を受け入れがたく感じる部分もあったように思われる。そのため、本章では、ヤスパースから見たキェルケゴール像について考察することで、それと同時に浮かび上がってくるキェルケゴール思想とヤスパース哲学の相違性についても考察する。

まず、ヤスパースから見たキェルケゴールのキリスト教観について考察する。ヤスパースによれば、キェルケゴールの求める真のキリスト教とは、新約聖書のキリスト教 *Das neutestamentliche Christentum* (Kier :in AP S.300) に忠実であるということだ。ヤスパース曰く、キェルケゴールの考えにしたがえば、キリスト教とは、神がイエス・キリストという形でもって、世界に現われたことを信ずる宗教、すなわち神人 *Gottmensch* としてのイエスが我々の悟性にとっては理解不可能な逆説 *Paradox* として現われたことを信ずる宗教である、とする (Kier :in AP S.299)。またヤスパース曰く、キェルケゴールの考えによれば、そもそも、キリスト教とは、神と人間の住まう世界との間に救いような断絶があることを認める宗教であり、それゆえに、神の啓示は、我々の悟性でもって理解し得るような直接的な言表ではなく、むしろ間接伝達 *indirekte Mitteilung* (Kier :in AP S.299) によるものだ、とする。そのため、神の啓示を、歴史的な聖書研究や思弁的な教義学という悟性的な分析によって理解しようとする研究者は、キェルケゴールの考える真のキリスト者から見ると、キリスト教的信仰の放棄 *ein Preisgeben des christlichen Glaubens* (Kier :in AP S.298) を実行している者として映る。以上が、ヤスパースから見たキェルケゴールの

キリスト教観である。

こうしたことを踏まえたうえで、キェルケゴールの求める真のキリスト者の特徴とは、次の通りである、とヤスパースは述べる。ヤスパース曰く、その特徴とは、真に新約聖書のキリスト教に忠実な信徒であろうと自ら欲して、悟性という合理的・論理的な思考様式によって神を理解しようとする組織体としてのキリスト教やそれに盲従する大衆などといった、世俗的で表面的な信仰を行う者に対して反抗するが、それゆえに苦悩や葛藤に苛み、その結果自ら死ぬことになろうとも、それでも自ら真理として見出した神に徹頭徹尾帰依する殉教者であろうとすること Martyrium (Kier :in AP S.299) だ、としている。この殉教者であろうとすることは、飯島宗享によれば、「キリストに従うとは模範としてのキリストを生きること」\*17、すなわち「キリストの『まねび』」\*18を意味するものであり、それは、キェルケゴール思想における実存三段階でいえば、〈宗教性B〉の段階にあたるものと言える。

そうしたキリストのまねびであろうとして、自らの生をも賭す仕方でも苦しみもがきながらも、それでも真に神に相對しようとする単独者の姿は、キェルケゴールの言葉で言えば、『死に至る病』における絶望の姿であると言えよう。また、その絶望の姿を、ヤスパース哲学における表現を借りて考えれば、『哲学』第3巻（形而上学）第3章「超越者との諸々の実存的連関 Existentielle Bezüge zur Transzendenz」の中で記されている反抗 Trotz と 帰依 Hingabe の概念にあたる、と考えることもできよう。その著書の中で、ヤスパースは、旧約聖書のヨブやギリシャ神話のプロメテウスなどを例に挙げながら、反抗と帰依についての説明を行っているが、その内容を要約すると、次のようになる。ヤスパース曰く、人間は、現世での苦境や葛藤に憤激し、自分が神（ヤスパース哲学の概念で言えば、超越者）の御許に囲われた存在であることから脱し、そこから独立して自らの力で自分自身であろうと欲することで、神との闘いに真剣に挑み反抗するものの、その闘いに敗れるがゆえに、自分が神の御許に囲わ

\*17 飯島宗享、「キェルケゴールにおけるキリスト教と教会について」、『理想』、第 269 号、理想社、1955 年、39 頁。

\*18 同上。

れた存在であるという事実を真摯に受け入れることで、神に帰依するものだ(Ph.III S.71ff.)、としている。すなわち、可能的実存としての人間が、超越者を求めて、実存的に関わろうとする際、その人間は、超越者への反抗と帰依という互いに相反する両極性のただ中に立たされながらも、どちらか一方の極に固執し、妥協することが許されぬまま、その両極性の間を苦悩と葛藤を繰り返しながら、たゆたうことである、とヤスパースは述べる。以上が、ヤスパースの述べる反抗と帰依である。

では、その反抗と帰依の概念を、キェルケゴールの信仰に当てはめると、どのようなものになるのか。たしかに、ヤスパース研究者鈴木三郎が指摘する通り<sup>\*19</sup>、キェルケゴール固有の真理とは、真にキリスト教の神に信仰し帰依することであって、神に背き反抗することではないということから、キェルケゴールの信仰が、ヤスパース哲学における反抗と帰依の概念に完全に妥当するものにならないかもしれない。しかし、私は、あえてこの反抗と帰依の概念をキェルケゴールの信仰に当てはめて考えてみたいと思う。その試みは、次の通りである。

キェルケゴールは、キリストのまねびであろうとせぬまま、表面的な信仰を行っていた当時の組織体としての教会、およびその教会に盲従する大衆に対して反抗し、教会や大衆とは違う仕方、自らの主体的な信仰に基づいて神に帰依しようとする。しかし、その神への帰依は、大谷愛人が述べるような、「人間と神との間には人間に理解し得ないところの質的差異」<sup>\*20</sup>が示される「『躓き』 Forargelse」<sup>\*21</sup>によって碎かれるため、成就されることはない。それゆえに、キェルケゴールは、神との遠さを感じ、再び絶望に見舞われる。このように、自らの信仰の揺らぎや葛藤が表れるものがキェルケゴールの信仰であり、

<sup>\*19</sup> その鈴木三郎の指摘とは、次の通りである。「…(前略)…K [キェルケゴール]の内的行為は専ら帰依の方向において『神により近く来よう』とするあがきであり、彼自身の反抗の態度は終始どこにも見当たらない」(※□は、本論文執筆者の補足。引用文中にある傍点は、原文のままに表記した)。(鈴木三郎、「キェルケゴールとヤスパース」、『理想』、第269号、理想社、1955年、33頁)。

<sup>\*20</sup> 大谷愛人、「キェルケゴールにおける逆説の概念」、『理想』、第269号、理想社、1955年、71頁。

<sup>\*21</sup> 同上。

それはヤスパース哲学における反抗と帰依に相当するものであった、と考えられるのではなからうか。

ヤスパースによれば、そうしたキェルケゴールの信仰は、はてしなく自らの内に「私は本来何者であり、何をすべきか」を問い返し、それを自分自身に訴えかけ、無限の内省 *unendliche Reflexion* (VE S.14) \*<sup>22</sup>を行うことによって、神を真に仮借なく求めんとする〈誠実さ *Redlichkeit*〉(Kier :in AP S.304) に基づくもの、とする。ヤスパース研究者林田新二の理解した、ヤスパースがキェルケゴールを高く評価したとする誠実さとは、このことである。

特に、このキェルケゴールの誠実さは、キェルケゴール自らの信仰だけに向けられたものではなく、むしろキェルケゴールの著作を読む読者にも向けられたものである、と私は解釈する。具体的に言えば、その誠実さとは、①「キェルケゴールの著作を通して、読者自身が実存に目覚めることを目指した誠実さ」であり、また②「読者が文字通り、キェルケゴールの思索や人生に追従すると、その読者自身が、キェルケゴールと同じように〈例外者 *Ausnahme*〉の道をたどることになるため、それに対して警告する誠実さ」である、と私は解釈する。

キェルケゴールの仮名著作の中には、審美家や倫理家、そして宗教家などといった様々な人間模様がキェルケゴールの生み出す美しい文章で描かれている。しかし、ヤスパースによれば、キェルケゴールが仮名著作を記した意図とは、読者が美しい文章にただ単に魅了されることにあるのではなく、むしろ読者とその文章の内容を、読者自身の人生と照らし合わせることで、読者自身で意味を見出し、それを読者自身の人生の糧になるように訴えかけることにある、とする。キェルケゴールの仮名著作に対しては、そうしたスタンスで関わるべきあり、研究者が行うような単なる学術的な研究はキェルケゴールの意図に反する、ということを押捺するために、ヤスパースは、キェルケゴール生誕 150周年を祝して開かれた、ユネスコ主催のキェルケゴール・コロキウムに際して講演した「今日のキェルケゴール」において、キェルケゴールの文章を引

---

\*<sup>22</sup> ヤスパースは、『理性と実存』の中で、その無限の内省を行う人物として、キェルケゴールとニーチェを挙げている (VE S.14)。

用する形で、次のように述べている。

キェルケゴールの故郷や世界、そしてユネスコがキェルケゴールを称賛していることについて、彼は、なんと言うのでしょうか。彼は、教授の職に就く我々に関して、あらかじめ、彼は我々の行いを遠ざけるように、次のように言う。「私は、それほど少なからぬ知的遺産を残すだろう。ああ、そして、私は同時に、誰が私の遺産を相続するのであろうかということや、私にとってこんなにもとてつもなく不愉快な人物を知っている。その人物とは、とはいえこれまでにより良いもののすべて〔キェルケゴールの知的遺産〕を相続してきた者であるが、大学の講師であり、教授である。また、もし教授がこのより良いもののすべてを読み得るようになるにしても、そのより良いもののすべては、教授の心にとどめおくものではなく、否、そのより良いもののすべてもまた講義で用いられるだけであろう」。

(KierH :in AP S.323) \*23

これが、上記で挙げた①の誠実さである。

また、ヤスパースによると、キェルケゴールは、自分がキリスト者であると自称することを拒否している (Kier :in AP S.298)、とする。それは、キェルケゴール自身が、例外者であることを自覚している (VE S.21) がゆえに、読者が誤って、キェルケゴールを模範的キリスト者と崇め、文字通り、キェルケゴールの思索と人生に追従することを忌避してのことであった、と私は解釈する。その根拠として、私は、ヤスパースが引用した次のキェルケゴールの文を、挙げる。「私に追従するなかれ。君自身が重要なのだ。一ただ神にのみ、君は君自身を支えることができる。いかなる人間でもなく、少なくとも私ではない」 (KierT :in AP S.315) \*24。これが、上記で挙げた②の誠実さである。

ではなぜ、キェルケゴールは、読者に対して、例外者としての自らの信仰に

\* 23 引用文中の [] は本論文執筆者の補足。また、ヤスパースは、この文におけるキェルケゴールの引用を、具体的に明記していない。

\* 24 ヤスパースは、この文におけるキェルケゴールの引用を、具体的に明記していない。

追従することを、そこまで忌避するのか。それは、ヤスパースの考えに従えば、彼の行った<否定的決意 negativer Entschluß>に機縁するように思われる。ヤスパースによれば、否定的決意とは、自己固有の真理を求めんとする仮借なき誠実さに基づいて、世俗的な現世を徹底的に一切否定することで、自らの実存を成就しようとするがゆえに、それと同時に自らの身を滅ぼすほどの信仰によって、自分自身を食らいつくしてしまうことである (Ph.II S.318f.)、とする。その否定的決意は、別名、無制約的行為における宗教的世界否認 religiöse Weltverneinung (Ph.II S.318) とも呼ばれており、またその行いは、自死に類似するようなもの wie ein Analogon des Selbstmord (Ph.II S.320) である。キェルケゴールのエピソードで言えば、教会攻撃、レギーネとの婚約破棄、聖職者への就職に対する断念にあたる、とヤスパースは述べる (Kier :in AP S.301)。また、この否定的決意は、キェルケゴールが自ら定義した言葉である、とヤスパースは考えており、その否定的決意についてキェルケゴールが自ら言及し、定義したとする文章を、ヤスパースは、次のように引用する。

肯定的決意は、現に今存在することの中へ進み、自らの世界を獲得するが、否定的決意は、常に漂っている。… (中略) …否定的決意にとっては、否定的決意自らの否定性に固執するものとしての否定的決意の忠実さのために、いかなる肯定的充実も、生成しない。… (中略) …否定的決意は、世界の内にもいかなる足場をも固めることができないが、とはいえ、また別の世界の内でも、故郷とすることができない。

(Ph.II S.320) \*25

こうした叙述から、キェルケゴールの著作を読む読者が、例外者として生きるキェルケゴールの信仰に安易に追従し、模倣することを、キェルケゴールは忌避し、読者に対して警告を行っていた、というヤスパースの考えを見て取ることができよう。とはいえ、この否定的決意、言い換えれば、自らの生を賭す仕方方で自己固有の真理を誠実に探究しようとするこの姿勢こそ、まさしく実存で

\* 25 同上。

あり、それを体現した人物こそ、キェルケゴールである、とヤスパースは考え、キェルケゴールを高く評価していたものと考えることができよう。

しかし、一方で、そうしたキェルケゴールの実存概念は、ヤスパースにとって、受け入れがたいものでもあった、と私は考える。その理由の一つとして、ヤスパースが忌避していたとする「狂信的な真理のパトス Das fanatische Wahrheitspathos」(W S.560)を想定することができるが、それについて取り挙げてみたいと思う。ヤスパース研究者中山剛史によれば、ヤスパースの自著『真理について』の中で表現されている狂信的な真理のパトスとは、独善性と排他性、すなわち、「自己の確信した真理を唯一絶対化し、万人にとっての普遍妥当な真理とみなし、他者にもそれを強要するという点」\*<sup>26</sup>および「あらゆる対話や交わりを受けつけないものであるという点」\*<sup>27</sup>をそれぞれ有するものだ、としている。たしかに、キェルケゴールの否定的決意は、ヤスパース哲学の言葉で言えば、可能の実存の行う無制約的行為にあたるものであり、それは実存概念の特徴を表すものである。しかし、その否定的決意が極度に高まってしまった場合には、上記のような狂信的な真理のパトスが暴発する危険性も孕んでいると考えていいだろう。

それだからこそ、ヤスパースは、実存概念の構築を、キェルケゴールの否定的決意だけではなく、他者との〈交わり Kommunikation〉に基づいた形で実現しようと考え、それを自らの思索の中で表現しようとした、ということが考えられる。その他者との交わりとは、互いに自己固有の真理を求めあう可能の実存同士が、自己固有の真理に妄信したり、妥協したりすることなく、互いに対話することを通して、自己固有の真理を互いにはてしなく見出し続けることを意味する。この他者との交わりの有無こそ、キェルケゴール思想とヤスパース哲学の相違性であると考えることができよう。

\*<sup>26</sup> 中山剛史、「ヤスパースにおける〈実存倫理〉と〈理性倫理〉」、『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』、第11号、2018、10頁。

\*<sup>27</sup> 同上。また、引用文中にある傍点は、原文のままに表記した。

## 結びにかえて—キェルケゴールの社会性についての考察—

これまでの考察をまとめると、次の通りになる。ヤスパースは、キェルケゴール思想を受容する仕方、自らの実存概念を形成しており、その実存を体現する人物こそ、キェルケゴールであったと高く評価していた。それゆえに、キェルケゴール思想とヤスパース哲学の類似性として、孤独の中で自己固有の真理を求めんと自らの内面性に関わろうとする行い（キェルケゴール思想の言葉で言えば、関係としての自己である単独者の信仰、ヤスパース哲学の言葉で言えば、可能的実存の行う内的行為）を取り挙げることができた。しかし一方で、キェルケゴールの実存概念である否定的決意は、狂信的な真理のパトスという危険性をも孕んでいる。こうしたことから、ヤスパースは、他者との交わりという新たな実存概念の構築を試みることに至った。この他者との交わりの有無が、キェルケゴール思想とヤスパース哲学の相違性であった。以上が、これまでの考察のまとめである。

では、キェルケゴールは、ヤスパース哲学における他者との交わり、すなわち、実社会に対して関わったり、働きかけを行ったりする社会性が全くもって欠如した思想家なのか。私はそうとは考えない。以下、結びにかえて、キェルケゴールの社会性について、考察する。

まず、社会性があるとするヤスパース哲学における他者との交わりについて考えてみたい。その他者との交わりとは、基本的には＜実存的交わり *existentielle Kommunikation*> (Ph.II S.58) のことを指す。その実存的交わりとは、普遍的真理に反して、自己固有の真理を求めるがゆえに、例外者となってしまった可能的実存同士が、自分のすべてをさらけ出しあうことで、またそのように自分のすべてをさらけ出せと他者に訴えかけることで、互いに仮借なく自己固有の真理をはてしなく探究せんとする闘いを意味するものである。言うなれば、それは、＜愛しながらの闘争 *liebender Kampf*> (Ph.II S.65) なのである。また、その実存的交わりは、飯島宗享の述べるような<sup>\*28</sup>、神の恩寵を得た

\*28 その該当箇所は次の通りである。「真理の真理性は形にあるのではなく内面性であるから、真理が既存のものとして形に固定されるとき、それと抗争して内面化することは真理そのものの要求である。そして内面化の抗争をなす者は単独者である。… (中略) …キリスト者とはこの意味の戦闘的単独者であり、そのような単

とする勝利の教会に反して、自らの主体的な信仰でもって、自らの神を見出し帰依しようとして、自らの内面性に関わる単独者同士が、互いに関わりあい、集う中で形作られる〈戦う教会〉に相当するものである、と考えられる。このように考えれば、キェルケゴールにも社会性があった、とすることができるのではなからうか。

たしかに、ヤスパース研究者布施圭司の述べる通り<sup>\*29</sup>、実存という現実態になろうとする目的地を、キェルケゴールのように、我々の世界の外にあるキリストに関わることに設定するか、それとも、ヤスパースのように、我々の世界の内にとどまりながらも、その中で出会うことのできる他者との交わりに設定するか、という違いが、キェルケゴール思想とヤスパース哲学との間で見受けられる。その違いによって、社会性の定義も異なるものになると言えよう。しかし、以上の考察の通り、ヤスパース哲学における実存的交わりと同じように、キェルケゴール思想においても社会性があったと考えることは可能であろう。なぜなら、新約聖書に忠実に生きんとする単独者であるべきだ、またそれによって形作られた戦う教会であるべきだ、とキェルケゴールが、世俗に埋没する大衆ないし社会に対して、訴えかけを行なったこと自体が、ある意味で、実社会に対して関わったり、働きかけを行ったりする社会性の一つである、と考えることができるからだ。

---

独者の集りとしてそこに神の臨在を約束されている教会とは戦闘的教会である」(飯島宗享、「キェルケゴールにおけるキリスト教と教会について」、41頁～42頁)。

\*<sup>29</sup> その該当箇所は次の通りである。「この両者の違いは、実存することの現実をキリストに関わることに限定するか、世界存在に関わることに見るかの違いにある」(布施圭司、「キェルケゴールとヤスパース—現実の意義をめぐって—」、『コムニカチオン』、第10号、日本ヤスパース協会、1999年、43頁)。